

薩摩焼・宋胡録写の性格をめぐる一試考 —近世陶磁器生産における政治的コンテクスト—

渡辺 芳郎

(鹿児島大学法文学部)

はじめに

近世薩摩焼に「宋胡録写」と呼ばれる鉄絵陶器の一群がある。鉄絵の線で器表面のほぼ全面が方形に区画され、その区画内にさまざまな文様を描き込んでいく点に特徴がある。薩摩藩の藩窯・豎野窯と苗代川で生産された。筆者はかつて考古学資料としての宋胡録写について整理、検討したことがあるが〔渡辺 2000、以下「前稿」と呼ぶ〕、その後も着実に出土資料が増加している。一方、宋胡録写に関する文献史料も新たに確認されつつある。

本稿では、現段階での宋胡録写の出土資料を改めて整理し、その特徴を抽出したい。その上で、文献史料の記述を手がかりとしながら、宋胡録写の性格について、政治的コンテクストを重視しながら若干の検討を試みるものである。なお行論の関係上、前稿と重なる記述があることを、あらかじめお断りしておきたい。

1. 出土資料から見た宋胡録写の特徴(表1・図1～3)

薩摩焼の宋胡録写の検討に入る前に、そのモデルとなった「宋胡録」について整理する。

現在、宋胡録と呼ばれる鉄絵陶器は、タイ中部のシーサッチャナーライやスコタイなどで焼かれた製品で、名称の由来は、それらの製品が集荷されたサワンカロークによるとされる。茶道具として伝わる宋胡録の多くは香合であり、その特徴は鉄絵で縦・横に描いた線で方形の区画を作り、区画の中を花文や幾何文(格子文など)などで埋めている点にある。宋胡録の名称は、小堀遠州(1579-1647)がみずから記したとされる箱書きに「すむころく」とあることから近世初期にはすでにその名称が定着していたと考えられる。その香合は「中興名物」にも含まれており、茶の湯の世界において古くより一定の評価を得ていたと言える〔西田 1993、根津美術館編 1993 など〕。ただし谷晃によれば、約 15,000 件の茶会記のうち近世末期までに「宋胡録」の名が出てくるのは 16 回ほどときわめ

て少なく、また宋胡録の茶碗や水指も見られるとはいえ、時代が下るとともに香合ばかりが用いられるようになるという〔谷 2004〕。

考古学的に見ると、シーサッチャナーライの鉄絵陶器は 16 世紀にまず沖縄に流通しはじめ、16 世紀中葉～後葉、西日本各地の遺跡からの出土が見られるようになる。しかしその出土数は少なく、器種組成は合子が中心であるという。また一般の商品として運ばれてきたと推測されている〔向井 2013: 249-252 頁〕。合子が中心である点は、茶会における香合としての使用と整合する。

一方、薩摩焼の宋胡録写は、白～灰白色もしくは黄白色の素地に鉄絵で文様を描いたもので、線で器表面のほぼ全面を区画し、その中を文様で埋めている点で、上記の宋胡録の特徴と共通する。つまり鉄絵であること、方形区画を作り文様で埋める、という点が「写」と呼ばれる理由と考えられる。

表 1¹⁾は、現段階で筆者が確認している宋胡録写の出土事例である。漏れもあるかと思うが、全体的な傾向はつかめよう。前稿 11 遺跡(地点)に比べて 2 倍以上の 28 遺跡(地点)が確認できたのは、鹿児島における近世遺跡の発掘調査事例の増加によるものである。以下、器種・出土遺跡(地点)の性格・描かれている文様・年代について検討したい。

1. 器種

宋胡録写は、窯跡 4 例、消費地遺跡(地点) 24 例、計 28 例からの出土を確認している。うちもっとも多い器種は土瓶(全体 14 例、消費地 12 例)で、半数を占める(図 1-10 など)。ついで花入と推測される瓶が消費地遺跡(地点)から 7 例あるが、同器種には口縁部が開く花瓶形(図 1-11・12)と円筒形(図 3-53・54)の二者が見られる。ただし破片からはどちらか区別のつかないものもある。他の大鉢(図 1-25～27)・鉢(図 1-2～4 など)・蓋物(図 1-28、図 2-41)・焜炉(図 1-7)・火入(図 3-61)とした器種

表1 宋胡録写出土一覧(2014年11月現在)

No.	所在地	遺跡名	土瓶	瓶	大鉢	鉢	蓋物	焜炉	火入	その他	出土数※	図	文献
1	鹿児島市	堅野冷水窯跡	身2, 蓋2							甕1 (+1) 不明2	7 (+1)		田澤・小山1941
2	鹿児島市	堅野冷水窯跡	身2 (+1) 蓋3								5 (+1)		戸崎他編1976
3	鹿児島市	堅野長田窯跡								蓋1, 不明1	2		田澤・小山1941
4	鹿児島市	堅野稲荷窯跡				1 (碗?)					1		前田1938
5	鹿児島市	鹿児島城本丸跡	身1, 蓋10	花瓶形2	3	3	身1	1		碗1, 蓋置2 合子蓋1	25	1-28	戸崎他編1983
6	鹿児島市	鹿児島城二之丸跡 (県遺構編)		花瓶形2			蓋1				2	29・30	諏訪他編1991
7	鹿児島市	鹿児島城二之丸跡 (県遺物編)	身2, 蓋1	2?	2?		身2 蓋3 (+1?)	4			16 (+1)	34-35	弥栄編1992
8	鹿児島市	鹿児島城二之丸跡 (鹿児島市)		円筒形?1		1?					2	31-32	出口編1984
9	鹿児島市	鹿児島城二之丸跡 6地点								杯? 1	1	33	出口他編2000
10	鹿児島市	宮之城島津家屋敷跡			1						1	46	黒川編2003
11	鹿児島市	造士館跡		1?							1	47	出口・濱川編 1992
12	鹿児島市	福昌寺跡							2		2	48-49	有川編2008
13	鹿児島市	名山遺跡							1		1	50	佐々木他編2002
14	鹿児島市	若宮遺跡D地点	身1								1	51	長野編2014
15	鹿児島市	大龍遺跡 (第5次調査)	身1								1	52	本田・下山編 1986
16	鹿児島市	大龍遺跡 (第7次調査)		円筒形2							2	53-54	出口編1992
17	鹿児島市	大龍遺跡B地点	身2 (同一個体?)								2	55-56	吉永他編2001
18	鹿児島市	大龍遺跡D地点	身1	1							2	57-58	藤野・出口編 2006
19	鹿児島市	大龍遺跡G地点	蓋2								2	59-60	永野編2009
20	鹿児島市	浜町遺跡	蓋1						1		2	61-62	青崎編2000
21	鹿児島市	北麓F地点	身1								1	63	永野編2010
22	鹿児島市	島津家玉里邸跡							1		1	64	田中・出口編 2004
23	鹿児島市	郡山地頭仮屋跡	身1, 蓋1								2	65・65	有川・深野編 2006
24	いちき串木 野市	柵城跡G調査区								碗(杯) 1	1	67	富田他編2010
25	宮崎県 都城市	八幡遺跡								盃台1	1	68	永友他編2003
26	東京都 台東区	上野忍岡遺跡群	身1								1	69	山内他編1997
27	東京都 渋谷区	千駄ヶ谷五丁目遺跡 (第3次調査)	身1								1	70	鈴木他編2008
28	沖縄県 宮古島市	住屋遺跡								三足香炉1	1	71	砂辺他編1999
出土数※			身16(+1) 蓋20	11	6	5	身3 蓋4(+1?)	5	5	13(+1)			
全体：28遺跡(地点)			14	7	3	3	3	2	4	7			
消費地：24遺跡(地点)			12	7	3	2	3	2	4	5			

※「出土数」は「報告された破片数」である。

の出土遺跡(地点)は2~4例にとどまる。このほか蓋置2点(鹿児島城本丸跡、図1-8・9)、盃台1点(八幡遺跡、図3-68)、三足香炉1点(住屋遺跡、図3-71)などがある。沖縄県宮古島市(旧平良市)に所在する住屋遺跡出土の獣面脚を作る三足香炉は、ま

だ本土地域で類例が知られていない。また先述したようにモデルとなった宋胡録では香合(合子)が多いが、宋胡録写の類似例としては、鹿児島城本丸跡出土の合子蓋1点(図1-24)のみで、両者の違いの一端を示している。

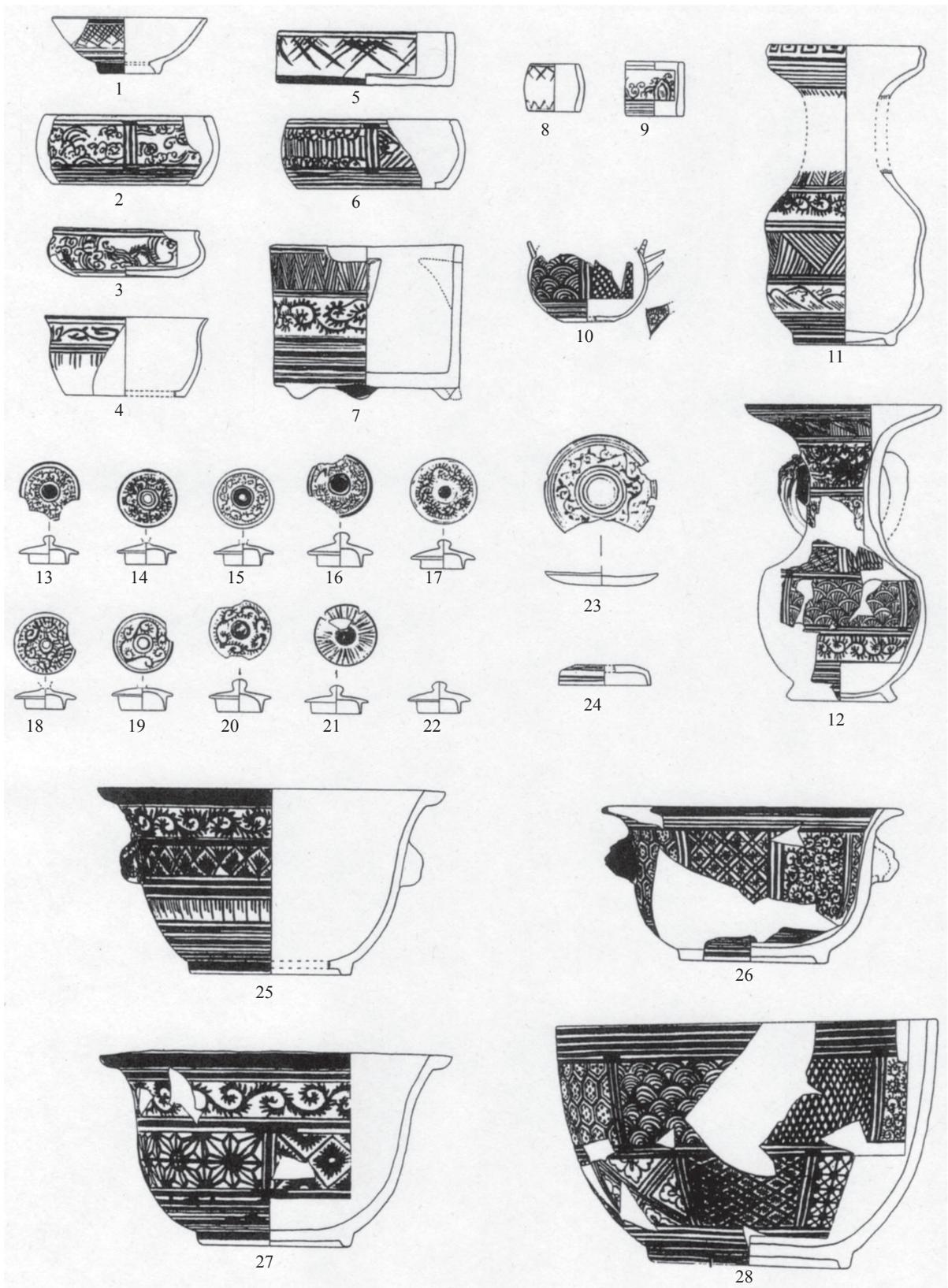


図1 宋胡録写出土例1 (S=1/6) (1~28: 鹿児島城本丸跡)

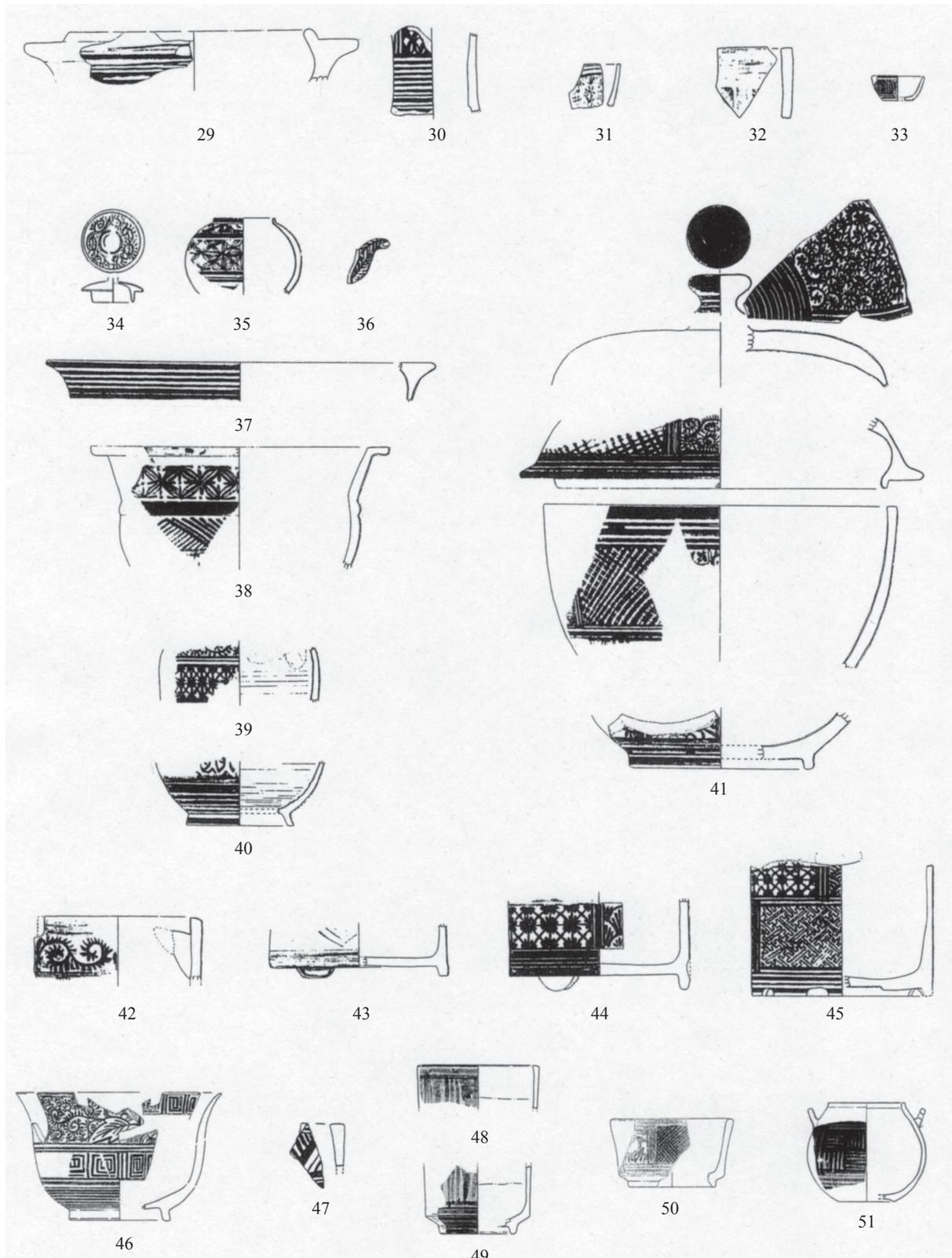


図2 宋胡録写出土例 2(S=1/6)

(29・30: 鹿児島城二之丸跡(県遺構編), 31・32: 鹿児島城二之丸跡(鹿児島市), 33: 鹿児島城二之丸跡 G 地点, 34~45: 鹿児島城二之丸跡(県遺物編), 46: 宮之城島津家屋敷跡, 47: 造士館跡, 48・49: 福昌寺跡, 50: 名山遺跡, 51: 若宮遺跡 D 地点)

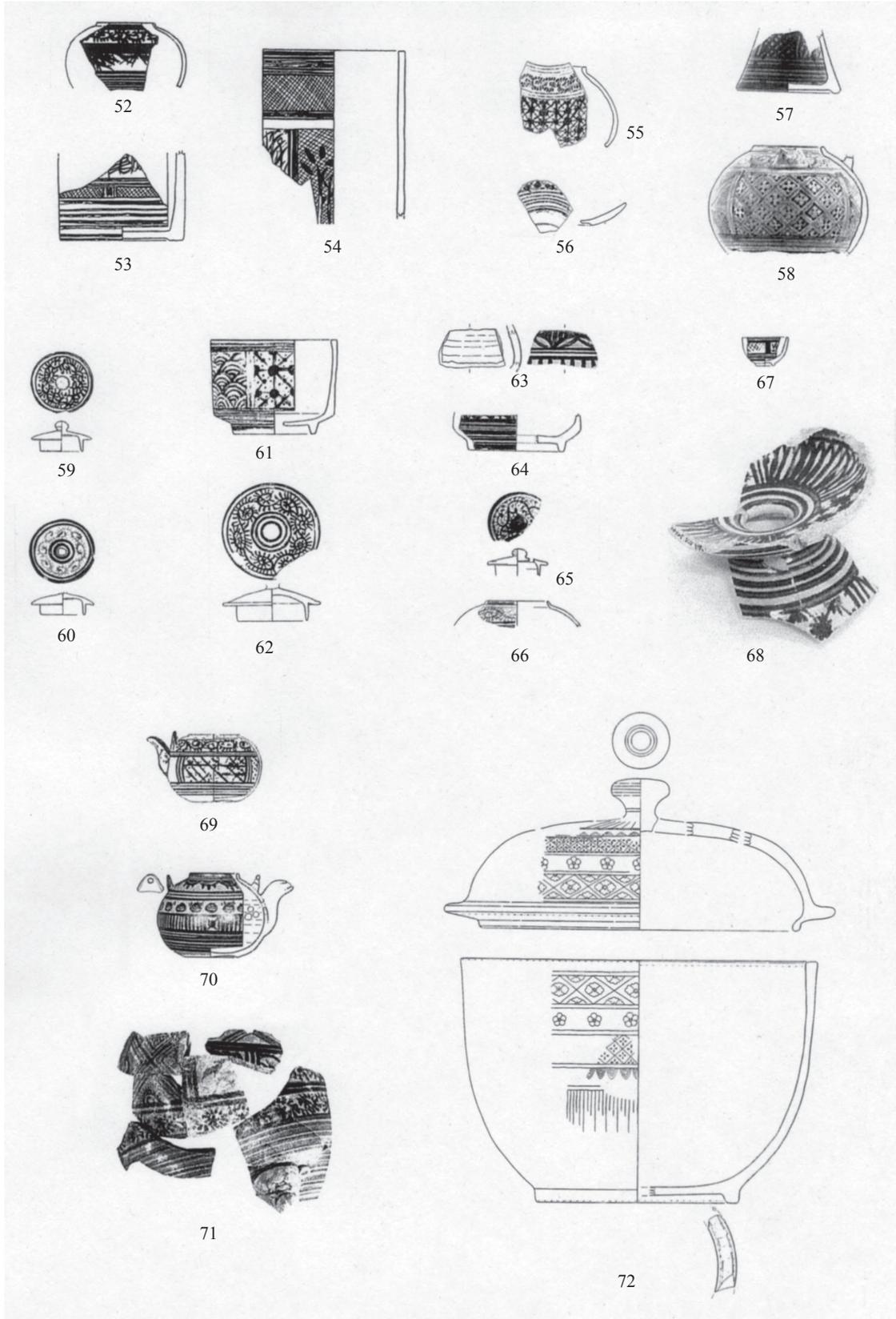


図3 宋胡録写出土例3(S=1/6,68・71は縮尺不同)

(52: 大龍遺跡(第5次調査),53・54: 大龍遺跡(第7次調査),55・56: 大龍遺跡B地点,57・58: 大龍遺跡D地点,59・60: 大龍遺跡C地点,61・62: 浜町遺跡,63: 北麓遺跡F地点,64: 島津家玉里邸跡,65・66: 郡山御飯屋跡,67: 柗城跡G調査区,68: 八幡遺跡,69: 上野忍岡遺跡群,70: 千駄ヶ谷5丁目遺跡(第3次調査),71: 住屋遺跡,72: 弓町遺跡第6地点(豎野窯象嵌蓋物)

2. 出土遺跡（地点）の性格

窯跡としては、豎野冷水窯跡・豎野長田窯跡・豎野稲荷窯跡で出土もしくは採集されており、薩摩藩窯である豎野窯製品に宋胡録写があることがわかる。苗代川（鹿児島県日置市美山）でも生産していたが²⁾、考古学資料としては確認されておらず、その生産量や製品についてはほとんど不明である。以下で取り上げる文献に見られる宋胡録写はすべて豎野窯のそれについてであるが、考古学資料については、苗代川産が含まれる可能性も考慮に入れつつ検討していきたい。

ところで前稿でも検討したが、『薩摩焼の研究』において、豎野冷水窯跡で採集された製品破片は総計413点とされ〔田澤・小山1941：117頁〕、表1に挙げたように宋胡録写破片を8点とするならば、その比率は2%不足である〔渡辺2000：80頁〕。また現在、1976年に発掘調査された豎野冷水窯跡出土資料の再整理が進行中であるが〔調査課第一調査係2014〕、宋胡録写の陶片は全体の出土量に比べるときわめて微量であるという³⁾。豎野冷水窯での宋胡録写の生産量は白薩摩などに比べるとはるかに僅少であったと言えよう。

消費地遺跡（地点）では鹿児島城本丸跡・二之丸跡において出土数（報告された破片数）が他を圧して多く、器種的にもヴァリエーションが豊富である。宋胡録写を含む豎野窯製品の主たる供給先が鹿児島城であったことを反映していると言えよう⁴⁾。

次いで鹿児島城下町北部の「上方限（かみほうぎり）」と呼ばれる上級武家屋敷や寺院が集中した地域での出土が多くみられる。宮之城島津家屋敷跡、造士館跡、福昌寺跡、大龍遺跡（大龍寺跡など）、名山遺跡、若宮遺跡D地点などがそれである。このうち鹿児島城本丸跡・二之丸跡出土例と類似し、今のところ他遺跡（地点）では見られない大鉢（図2-46）が出土している宮之城島津家は、「一所持ち」と呼ばれる私領主であり、藩内でも高位に属する家格である。ただし以上のことは、現在の発掘調査が「上方限」にかたよっているという事情があり、城下町全体での出土状況については不明である。

前稿段階では近世遺跡の発掘調査が鹿児島城・城下町に集中していたこともあり、それ以外の地域では確認できなかったが、以後、郡山御仮屋跡（旧郡山町、現鹿児島市）や、「郷土年寄」加藤家の屋敷跡である

柵城跡G調査区（いちき串木野市）など、藩内の地方行政の中心地においても出土が確認できる。また宮崎県都城市は、近世においては薩摩藩に属し、八幡遺跡は都城島津家の家老屋敷跡である。つまり城下町以外の藩内の出土例は、地方における支配・行政の拠点的な地点にかたよる傾向が看取される。

このほか江戸と沖縄で確認できる。近年、江戸遺跡出土の薩摩焼が抽出されつつあるが〔井上2011、渡辺2012など〕、その中に宋胡録写も少数ながら含まれており、いずれも土瓶である（上野忍岡遺跡群・千駄ヶ谷五丁目遺跡、図3-69・70）。また獣面脚香炉が出土した沖縄県宮古島の住屋遺跡は、琉球王府が派遣した役人が居住する在番仮屋があった場所である〔平良市史編さん委員会編1988：103頁〕。筆者はかつて沖縄における豎野窯製品の出土が首里城およびその近辺に見られることから、薩摩藩内と同じように社会階層と結びついて流通していた可能性を指摘した〔渡辺2004a：65頁〕。住屋遺跡も同様の事例としてとらえることができる。

3. 器種と消費地遺跡（地点）との関係

器種と消費地遺跡（地点）との関係を見ると（表1）、器種によって様相が異なることがわかる。つまり①遺跡の性格にかかわらず広く出土する器種（土瓶）、②鹿児島城に限定される器種（鉢・蓋物・蓋置など）、③鹿児島城以外でのみ見られる器種（火入など）である。もちろん考古学的に「ない」と言うことは不可能なので、②③については、今後の資料の増加にともなって変更される可能性もあるが、以上のような消費地遺跡（地点）の違いは、同じ宋胡録写でも、器種の違いによって供給・流通先に差異があった可能性を示唆している。

このような供給・流通先の差異がどのような理由で生じたのかについて、明確な説明は現段階では持ち合わせていない。ただ近年、深港恭子により明らかにされた豎野窯における「商売焼」が関係する可能性がある。深港は文政6年（1823）の『立野並苗代川焼物由来記 高麗人渡来在附』〔谷川編1970：673-679頁、以下『由来記』と略す〕の記述から、白薩摩には、その使用素地の品質の違いから御用品と商品の二者があったことを指摘している〔深港2013・2014：168-170頁〕。後述するように宋胡録写も同様に御用品と商品があった可能性があり、供給先の違いがその

違いに結びつく可能性も考えられる。また現段階では具体相が不明な苗代川産宋胡録写についても含めて考えていく必要がある。今後の課題としたい。

また藩内流通を主体とした薩摩焼の中であって、土瓶は全国的に流通していた可能性のある器種である〔渡辺 2006・2012 など〕。現在、藩外で出土が確認されている土瓶の多くは苗代川産であるが、豎野産土瓶についても佐藤信淵（1769-1850）の『薩藩経緯記』（1830）に「館野の白焼の土罐（ドビン）其名既に天下第一と称す」〔佐藤 1883：21 頁〕とある。この記述は「白焼」＝白薩摩に限定しているが、豎野窯の土瓶が、この時期において世上において高く評価されていたことを示し、宋胡録写の土瓶が広く出土することも、そのことと関係するかもしれない。

4. 描かれている文様

先述したように宋胡録と宋胡録写とは、鉄絵の線文で縦横に区画し、その区画内を文様で埋めていくという共通性がある。しかし区画内を埋める文様では、格子文など両者に共通するものもあれば、違う文様も数多い。

前稿において確認できた宋胡録写の文様には、斜格子文＋花卉文、唐草文、青海波、檜垣文、鋸歯文、七宝文、麻の葉文、亀甲文、紗綾文などがある。その後に出土した事例には、これらの他に、雷文、宝珠文、四方禪文などが見られる。これらは肥前磁器の染付などに多く見られるものであり、単に宋胡録を模倣するのではなく、国内供給を念頭に置いて文様が選択、採用されていると考えられる〔渡辺 2004c：66 頁〕。

5. 年代

宋胡録写の生産年代に関しては、残念ながら前稿段階から新しい情報は蓄積されていない。現段階で確認できる最古の同時代史料は、享保 12 年（1727）の「島津吉貴茶会記」における「御こかし入二か入やきすんころく平」（下線渡辺。以下同じ）という記述であり（後述）、遅くとも 18 世紀初頭には生産が始まっていたことがうかがいしれる。一括資料のような考古学的資料からも、今のところ 17 世紀までさかのぼる確実な資料は確認されていない。また編年的研究も資料的な少なさもあり、進んでいないのが現状である。

II. 文献に見られる宋胡録写

本章では文献上に記された宋胡録写について整理す

る。

まず『星山家系譜』の「金海」の項に、「夫々御帖佐之様召列、御屋敷之内焼物窯物迄御作事被成下、高麗（伝）之焼物御茶入、葉茶壺、御茶碗、太白、三島手、宋胡録其他段々焼調差上申候」とある〔田澤・小山 1941：131 頁〕。つまり金海こと初代星山仲次は、朝鮮伝来の技術で「宋胡録」を製作したという。ただしこの記述は初代仲次を称揚するための潤色とされている〔同上：114 頁〕。考古学的にも、初期薩摩焼の窯跡である始良市宇都窯跡〔深野編 2004〕・御里窯跡〔関編 2003〕、日置市美山堂平窯跡〔関・繁昌編 2006〕などで宋胡録写は見いだせない。

一方、前掲の『由来記』には「天和の此当時の御物竈御細工所被召置、仲次家の焼物竈細工所は拝領被仰付候由、惣て三代目星山事、瀬戸物並肥前青磁焼等稽古して被召登候由、段々繁昌相成、星山家の内與八、後に嘉入と為申者焼物名人にて、唐焼物名器の形素（葉か？一渡辺）を、御国諸所の岩土等を以能相似せ焼出し、其外御物の焼物も、すんこ三島色替赤焼黒焼手広に相成、二度焼も一度焼にて焼立」とある〔谷川編 1970：675 頁〕。つまり「焼物名人」である豎野窯陶工・星山嘉入（1649-1721）⁵⁾が、天和年間（1681-83）に「すんこ」を焼いたと記している。

この星山嘉入の名は、いわゆる「島津吉貴茶会記」〔横田・山田 1985〕の「享保十二年丁未十二月二十五日於市来寿亭 吉貴公へ久盤茶進上候時之記」に出てくる。これは享保 12 年（1727）に田ノ浦にある市来寿伯亭に川上久盤が第 4 代藩主・島津吉貴（1675-1747）を招いての献茶会の記録である。その中に「御こかし入二か入やきすんころく平」とあり〔同上：278 頁〕、「すんころく平（皿か）」＝宋胡録写の製作者として「か入」、つまり星山嘉入の名が記されている。『由来記』では星山嘉入が 17 世紀末に宋胡録写を焼いたとするが、本文書の成立が文政 6 年（1823）と後代なので、その真偽は判断が難しい。しかし「島津吉貴茶会記」は、1721 年に没したとされる嘉入とほぼ同時代であり、18 世紀初頭には宋胡録写が生産されていたことは確実性が高い。また藩主に進上する献茶会の席で使用されていたことは、藩内において宋胡録写が高い価値を付与されていたと推測されよう。

さらに『由来記』には、先に引用した文章に続いて以下のようにある。

「諸所白土砂の儀も、穎娃・山川・指宿・加世田の内にて上中下位有之候付、上位土砂場の儀は御物土砂場に被差分、自儘の取方御禁制被仰付稠敷（きびしく）被差留候、然は商売用位劣白土砂場の儀、屹と被差分置、今其場所にて取調申事にて候、商売焼方にも赤焼黒焼有之候、右の白土砂差交不申候ては出来不申製法にて、御物焼物稽古焼物にて御座候、其外すんこ三島の儀も同断にて御座候」〔谷川編 1970：675-676 頁〕

先述したように深港恭子は、この記述から白薩摩の原料である「白土砂」に上中下があり、御用品（「御物」）と商品（「商売焼」）があったことを指摘している〔深港 2013・2014：168-170 頁〕。その中に「すんこ三島の儀も同断」とあることから、白薩摩と同様に宋胡録写にも御用品と商売焼があった可能性が考えられる。

このような御用品と商売焼の違いが、具体的にどのような差異として、考古学資料や伝来品に認められるか、という問題は、検討が始まったばかりで、まだはっきりしない。ただし白薩摩には素地に白色度の高いものと、黒色微粒子を含むものが確認されており〔渡辺 2004b：39 頁〕、宋胡録写についても、あくまで経験的な知見であるが、鉄絵の描き方に精緻なものと粗雑なものがあるようである。これらの違いが御用品と商品との差異と結びつくのかどうか、今後検討していきたい。

さて宋胡録の使用方法について、もうひとつきわめて興味深い記述が、『旧記雑録追録』の安永6年（1777）の記事に見られる〔鹿児島県維新史料編さん所編 1976：526-527 頁〕。

文書 No.1453

暑気中爲伺御機嫌、

両御丸江薩摩守より毎年献上仕来候砂糖漬天門冬入蓋物並赤貝塩辛入蓋物、去年迄者肥前染付焼相用來候得共、当年より薩州製宋胡録手焼二而以来献上仕度奉存候、此旨奉得御差図候様旅中より申付越候、右焼物奉入御内見候、以上

「安永六年」六月二日 松平薩摩守内 有川勇馬

文書 No.1455

御札令披見候、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使被相伺之候、益御安全

御儀候間可御心易候、随而琉球布一箱並砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被献候之候、各申談遂披露候処一段之御仕合候、恐々謹言、
「安永六年」六月廿二日

松平右近将監

武元判

松平薩摩守殿

この記事についてもすでに深港が示しているが〔深港 2014：165 頁〕、その説明を参照すると、以下のような内容である。つまり將軍家への例年献上として「砂糖漬天門冬」と「赤貝塩辛」を入れる容器（「蓋物」「器」）に、昨年まで「肥前染付焼」を用いていたが、今年（安永6年）より「薩州製宋胡録手焼」を用いて献上したいと幕府に申し出たところ、許可された、と伝えている。

以上、文献に見られる宋胡録写の事例を挙げてきた。これらは文献の性格・内容から、いずれも豎野窯で焼かれた宋胡録写についての記述と考えられる。

まず確認しておきたいことは、これら文献において「すんこ」「宋胡録」「すんころく」「宋胡録焼手」という名称が用いられていることである。このことは近世においても宋胡録写のような鉄絵陶器は宋胡録をモデルとして生産された製品であることが認識されていたことを示していると言えよう。

つぎに宋胡録写の使用方法を見ると、「島津吉貴茶会記」から藩主進上の茶会で宋胡録写が用いられたことがわかり、高い価値が付与されていたことを示唆する。このことは先述した、豎野冷水窯跡出土資料において宋胡録写の生産量がきわめて少なかったこととも関係していよう。

そしてもうひとつ、そのような高い価値づけと関連するであろう宋胡録写の重要な使用方法として注目されるのが、例年献上品の容器としてのそれである。薩摩藩の例年献上品の内容は、文政元年（1818）の『武鑑』の記述〔石井監修 1982：13〕を整理すると表2になる（『武鑑』中では「時献上」と表記）。

「琉球芭蕉布」「泡盛酒」「琉球熬海鼠」「琉球油」「七島鯉節」「桜島蜜柑」など、薩摩藩あるいは琉球の特産品が献上されているが、その中の「暑中」の献上品として「砂糖漬天門冬」と「赤貝塩辛」が挙がっている。

表2 薩摩藩の例年献上品(文政元年(1818))

時期	献上品
正月元日	御鏡菱餅
正月三日	御盃台
同月七日	生鯛
二月	鯛(すめ) 昆布御樽
帰国御礼	琉球芭蕉布三種二荷
四月	丸熨斗香 寿帯香 竜涎香 長寿大官香
暑中	琉球布 砂糖漬天門冬 赤貝塩辛 泡盛酒
七月	御鯖代黄金
七月十五日	蓮御飯 刺鯖
八月	国許干肴
九月	干鱈(なます) 残魚
十一月	琉球熬海鼠
寒中	琉球油 七島饅頭
十二月	桜島蜜柑 焼鮎

る⁶⁾。『旧記雑録追録』の記述は、これらを納める容器として、安永6年より「薩州製宋胡録手焼」の「蓋物」が用いられたとしている。

なぜ献上品容器として宋胡録写が選択されたのか、については、章を改めて検討したい。

III. 宋胡録写の性格

以上、考古学資料として確認できる宋胡録写の特徴と、文献史料に見られるそれとを整理してきた。最後に両者を結びつけることで、薩摩焼における宋胡録写の性格について若干の検討を試みたい。

考古学資料としての宋胡録写を見ると、鉄絵陶器であること、方形区画に文様を埋めている施文方法など、モデルの宋胡録と共通する特徴があるとはいえ、器種の多様性、採用される文様の違いなど、相違点も多く見られる。しかし文献において「すんこ」「すんころく」「宋胡録焼手」などの記述が見られることから、近世薩摩藩において宋胡録写は、宋胡録をモデルとしていることが意識されていたことを示している。そして『旧記雑録追録』の記述から、例年献上の天門冬砂糖漬と赤貝塩辛の容器として、肥前染付を用いていたのを、薩摩焼に転換する際に、その宋胡録写が選択されていることがわかる。

大橋康二は、近世における将軍家と各大家との主従関係の確認行為として、参勤交代とともに例年献上の重要性を指摘している。例年献上とは「月次献上」「年中献上」とも呼ばれ、諸大名が石高に応じて、月

ごとに国元の産物などを将軍家へ献上する制度で、身分や家格により細かく規定されていた。そして参勤交代とともに、大名に経費を使わせ、将軍が大名とは別格の存在であることを思い知らせるためのものであったという〔大橋2012:177頁〕。また佐賀に残る寛政8年(1796)の文献によれば、薩摩産の「砂糖漬壺」⁷⁾について、その寸法が不統一であることが幕府より書面で指摘されている〔大橋2004:61頁、深港2014:165頁〕。このことは例年献上品ならびにその容器に対して、幕府による厳しい規制があったことをうかがわせる。

そのような将軍家に対する重要な政治的儀礼である例年献上品の容器は、藩窯・豎野窯で生産されたと考えられるが、その際、もっとも生産量の多い白薩摩ではなく、宋胡録写が選択されたことに、薩摩藩の政治的意図が働いていたと想定することは決して不自然なことではないであろう。ではその政治的意図とはどのようなものか、私見を述べたい。

幕藩体制下における島津家・薩摩藩の特色としては、鎌倉時代以来400年に渡って南九州を領した由緒ある名家であること、琉球を含む石高72万石は、加賀前田家に次ぐ全国第2位の大大名であることなどともに、日本で唯一、琉球という「異国」を支配するという特異性が挙げられる。

慶長14年(1609)、島津氏は琉球に侵攻し、奄美諸島までを直轄地とするとともに、琉球王府は存続するものの、その政治体制や貿易体制(清朝への進貢貿易)に対して強い支配力を持つようになる。薩摩藩は寛永11年(1634)に琉球12万石を加えた計72万石が幕府より安堵され、琉球は独立した王国という立場を保持しつつも、幕藩体制に組み込まれることになる。島津家はその領内に「異国」を領有する希有な大名となった。

薩摩藩は琉球支配において対清貿易の独占という実際の利益を得るとともに、「異国領有」という特異性を、対外的な「イメージ戦略」としても利用していたと推測される。筆者はかつて苗代川に対する薩摩藩の朝鮮習俗保持政策を、「異国と結びついた藩」という特異性をアピールするための「イメージ戦略」の一環としてとらえた。この政策は、慶賀使・謝恩使など江戸にのぼる琉球使節の体裁を中国風にすることで、薩摩藩の威信を内外に示したのと同趣旨であり、また幕府が

朝鮮通信使やオランダ商館長の江戸参府を迎えることで、その権威を向上させたのと同じ目的であったと考えている [渡辺 2005]。

また新田栄治は、16～17世紀初頭、「呂宋壺」などの葉茶壺とともに、沈香や伽羅といった香木、鹿皮、鮫皮、蘇木、砂糖、生糸などが輸入され、島津家が重要な財源として東南アジア貿易に力を入れていたことを指摘している [新田 1997a・b]。さらに徳永和喜は、慶長9年(1607)から元和元年(1616)までに、徳川家康から東南アジア(柬埔寨・暹羅・安南・西洋・呂宋)向けの11通の朱印状を受給されており、同時期までの角倉了以父子が9通であったことを示し、当時の島津家を最大級の朱印船貿易大名と評している [徳永 2011: 43-48頁]。このように近世初期において島津家は東南アジア貿易を活発に行っていた。また重久淳一や橋口巨、岩元康成により、中世鹿児島に東南アジア陶磁器が数多く流通している様相が、考古学的にも明らかにされてきている [重久 2004、橋口 2011、岩元 2014] ⁸⁾。

以上のように近世の薩摩藩は、近世初頭において東南アジア貿易を積極的に取り組み、さらに全国で唯一、琉球という「異国」を支配した藩という特異性を有していた。薩摩藩にとっても「異国との結びつき」は、みずからの独自性・優位性を対外的にアピールする重要な「アイテム」であったと言えよう。そのような薩摩藩が、将軍家献上品容器として、東南アジアとの関係性、あるいは少なくとも「異国性」を暗示させる宋胡録写の蓋物を選択していることは、同様の「対外イメージ戦略」の一環としてとらえることも可能であろう。

では献上品容器としての「宋胡録焼手」の「蓋物」とは、具体的にどのようなものであったのか。現在のところ、宋胡録写の蓋物として挙げられるのは、鹿児島城本丸跡と二之丸跡出土の事例である(図1-28、図2-41)。本丸例は身のみで口径38.0cm、器高25.3cmをはかり、器壁が厚く重量のあるものである。二之丸例の身は推定口径が約35cmと本丸例とほぼ同大である。二之丸では蓋も出土しており、ややつぶれた宝珠形の把手が作られている。身の口唇部と蓋の受け口はともに釉剥ぎされている。

この宋胡録写蓋物が、献上品容器としての「宋胡録焼手」であるかどうかを確定する資史料はない。しか

し現在のところ、宋胡録写の蓋物に該当する資料が他に確認できていないこと、また鹿児島城以外に出土していないことから、本例が献上品容器としての宋胡録写の蓋物、あるいはその類品であった可能性を提示しておきたい⁹⁾。

おわりに

以下、本稿における検討結果をまとめる。

- (1) 宋胡録と宋胡録写とは、鉄絵陶器であること、方形区画に文様を埋めていく点では共通するが、後者は前者に比べ器種が多様であり、描かれる文様も異なっている。
- (2) 出土消費地遺跡は、鹿児島城を中心に上級武家屋敷や寺院、また地方の行政拠点にかたよる傾向があるが、器種によって出土する遺跡の性格に違いが見られる。
- (3) 宋胡録写の生産は18世紀初頭にすでに始まっていたと考えられるが、17世紀までさかのぼる確実な史資料は今のところない。
- (4) 現在、「宋胡録写」と呼んでいる鉄絵陶器は、近世においても宋胡録をモデルにした製品であるという認識があった。
- (5) 宋胡録写は藩主進上の茶会で用いられ、また将軍家への例年献上品の容器として採用されており、薩摩焼の中でも高い価値が付与されていた可能性がある。
- (6) 例年献上品の容器として宋胡録写が採用されたのは、薩摩藩の「異国と結びついた藩」という対外的なイメージ戦略の一環であった可能性が考えられる。

近世の陶磁器はその大部分が商品として生産された。それゆえその動向は需要と供給という経済的コンテキストで理解可能な部分が多い。しかし藩が直轄経営する藩窯においては、その生産の方向性や内容は、経済性よりも、藩の政治的意向からより大きく影響を受けたと考えられる。佐賀藩の鍋島藩窯がその最たる事例であり [大橋 2007・2012 など]、薩摩藩の藩窯・豎野窯も同様であったろう。近世初期、宇都窯・御里窯で焼かれた茶入が対幕府の政治的贈答物として扱われ [関編 2003、上原 2005、松村 2006]、豎野冷水窯で焼かれた型作りの精緻な皿類は、江戸の薩摩藩邸に供給され、重要な外交行事(特別な接待や婚礼など)の宴席で使用された可能性が指摘されている [調査課

第一調査係 2014: 75 頁]。また幕末、島津斉彬が大奥の天璋院に献上する朝顔植木鉢として、おそらく磯窯産と思われる「御庭焼御鉢」を用いたことも [渡辺 2013]、その一端を示している。

つまり近世陶磁器生産においては、経済的なそれより政治的コンテクストが、より大きな影響力を持っていた側面もあったことを指摘したい。ただし一方で、本文中でも触れたように、豎野窯製品には、いまだその実態は不明な点も多いとはいえ「商売焼」の存在も文献から明らかにされており、逆に政治的コンテクストのみによる解釈もまた一面的になりすぎる危険性があることも、同時に考えておかねばならないだろう。

謝辞

成稿にあたっては、深港恭子氏（薩摩伝承館）、関明恵氏（鹿児島県立埋蔵文化財調査センター）、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）に多くのご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

注

- 1) 表 1 に示した器種名は前稿からいくつか変更している。前稿では報告書 [戸崎他編 1983] に従って「箸置」としたものは、茶碗の蓋置の方が適切であるとの指摘を深港恭子氏より受け、変更した。また「火舎」についても『図説江戸考古学研究事典』[江戸遺跡研究会編 2001: 347-349 頁]を参照して「焜炉」に改めた。「花入」「飯櫃」は、より形態に即した名称として「瓶」「蓋物」とした。また前稿では鹿児島城本丸跡から出土した、鉄絵で胴部に草花文を描く土瓶 2 点を宋胡録写に含めたが [前稿 74 頁]、関西系陶器の可能性が高く、今回は除外している。
- 2) 「弘化三年 朴龍□」(弘化三年= 1846 年) 銘の宋胡録写長皿がある [向田 1978: 71 頁]。
- 3) 関明恵氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）のご教示によれば、あくまで暫定的な数字ではあるが、約 25,000 点の豎野冷水窯跡出土陶片（製品のみ）のうち、確認できた宋胡録写は 24 点とのことで、0.1% 以下である。ただし豎野窯には長田窯・稲荷窯など他の窯跡も確認されており [田澤・小山 1941 など]、豎野冷水窯跡出土資料の製品内容・組成が豎野窯全体のそれをどの程度反映しているかは、なお検討課題である。
- 4) 近年、豎野窯製品の重要な供給先として江戸の薩摩藩邸が想定されており [調査課第一調査係 2014: 73-75 頁]、藩邸跡も発掘調査されているが、出土資料につ

いては、その一部が報告されているにとどまり [毎田 2006・2007]、宋胡録写が出土しているかどうかは確認できない。

- 5) 星山嘉入の生没年は、本田親孚『称名墓志』（文化 11 年(1814)自序)による [薩藩叢書刊行会編 1909: 45 頁]。
- 6) 「天門冬」とは『広辞苑』（第 6 版、2008 年）によれば「クサスギカズラの塊茎を湯通しし、外皮を去って乾燥した生薬。漢方で鎮咳・利尿・強壯薬とする」とある (1956 頁)。なお「砂糖漬天門冬」「赤貝塩辛」の献上は、深港恭子によれば正徳 3 年 (1713) を初見とするという [深港 2014: 164 頁]。
- 7) ここでは「壺」と記されているが、『旧記雑録追録』に出てくる「蓋物」を指す可能性もある。
- 8) ただし鹿児島県内出土のタイ産陶磁器の中で宋胡録は確認されていないようである [重久 2004: 57 頁、橋口 2011: 13-14 頁、岩元 2014: 317 頁]。
- 9) 東京都台東区弓町遺跡第 6 地点の 011 号土坑 (18 世紀末～ 19 世紀初頭廃絶) から、豎野窯産と推測される象嵌の蓋物 (身と蓋) が出土している (図 3-72) [鈴木他編 2008: 118-120 頁]。身の口径は 35.0cm (推定)、器高 24.0cm をはかり、蓋にはややつづれた宝珠形の把手が作られている。鹿児島城跡出土の宋胡録写蓋物と同型同大と言え。また同一土坑からは鍋島藩窯の皿や平戸焼の磁器燭台など希少な資料が出土している [同 118-119 頁]。この土坑の時期における本遺跡は三千石の旗本・永井家拝領地であり、上級武家の屋敷地と言える [同 268-270 頁]。宋胡録写蓋物が例年献上品容器とするならば、この象嵌蓋物も近い使用方法が想像される。今後の検討課題としたい。

文献

- 青崎和憲編 2000『浜町遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター。
- 有川孝行編 2008『福昌寺跡』鹿児島市教育委員会。
- 有川孝行・深野麻衣編 2006『地頭仮屋跡』鹿児島市教育委員会。
- 石井良助監修 1982『編年江戸武鑑 文政武鑑 1』柏書房。
- 井上美奈子 2011「区内出土の薩摩焼土瓶について」『新宿区文化財調査年報 6 平成 21 年度』62-65 頁 新宿区教育委員会。
- 岩元康成 2014「中世後半から近世初頭の南九州における東南アジア陶磁器と華南三彩」『Archaeology from the South II 一新田栄治先生退職記念論文集一』311-323 頁 新田栄治先生退職記念事業会。
- 上原兼善 2005「大名茶の形成と島津氏」『日本史研究』

- 518 1-24 頁.
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房.
- 大橋康二 2004「将軍家献上以外の特別な意味をもつ肥前磁器二題」『佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要』3 1-62 頁.
- 大橋康二 2007『将軍と鍋島・柿右衛門』雄山閣.
- 大橋康二 2012「将軍家献上の鍋島・平戸・唐津」『将軍家献上の鍋島・平戸・唐津—精巧なるやきもの—』展図録 177-203 頁 佐賀県立九州陶磁文化館.
- 鹿児島県維新史料編さん所編 1976『鹿児島県史料 旧記雑録追録』6巻 鹿児島県.
- 黒川忠広編 2003『垂水・宮之城島津家屋敷跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター.
- 佐々木幸男他編 2002『名山遺跡』鹿児島市教育委員会.
- 薩藩叢書刊行会編 1909『薩藩叢書第四編 称名墓志』同会.
- 佐藤信淵 1883『薩藩経緯記』有隣堂.
- 重久淳一 2004「鹿児島県内から出土したタイ、ベトナム陶磁」『シンポジウム陶磁器が語る交流—九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器—』47-66 頁 東南アジア考古学会.
- 鈴木啓介他編 2008『東京都文京区弓町遺跡第6地点』三菱地所株式会社.
- 砂辺和正他編 1999『住屋遺跡 (I)』平良市教育委員会 (現宮古島市).
- 諏訪昭千代他編 1991『鹿児島城二之丸跡 (遺構編)』鹿児島県教育委員会.
- 関明恵・繁昌正幸編 2006『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財調査センター.
- 関一之編 2003『御里窯跡』加治木町教育委員会 (現始良市).
- 田澤金吾・小山富士夫 1941『薩摩焼の研究』東洋陶磁研究所 (国書刊行会復刻 1987).
- 田中竜太・出口浩編 2004『玉里邸跡・墓下遺跡』鹿児島市教育委員会.
- 谷晃 2004「茶会記のなかの「宋胡録」」『淡交』58-11 30-34 頁.
- 谷川健一編 1970『日本庶民生活史料集成』第10巻 三一書房.
- 調査課第一調査係 (東和幸・関明恵) 2014「収蔵遺物保存活用化事業—豎野 (冷水) 窯跡の再整理を中心に—」『鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要・年報 縄文の森から』7 65-82 頁.
- 出口浩編 1984『鹿児島 (鶴丸) 城二之丸跡』鹿児島市教育委員会.
- 出口浩編 1992『大龍遺跡』鹿児島市教育委員会.
- 出口浩・濱川まゆみ編 1992『造士館跡・演武館跡』鹿児島市教育委員会.
- 出口浩他編 2000『鹿児島 (鶴丸) 城二之丸跡 G 地点』鹿児島市教育委員会.
- 徳永和喜 2011『海洋国家薩摩』南方新社.
- 戸崎勝洋他編 1978『豎野 (冷水) 窯址』社団法人鹿児島共済南風病院.
- 戸崎勝洋他編 1983『鹿児島 (鶴丸) 城本丸跡』鹿児島県教育委員会.
- 富田逸郎他編 2010『梅城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター.
- 永友良典他編 2003『八幡遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター.
- 永野達郎編 2009『大龍遺跡 G 地点』鹿児島市教育委員会.
- 永野達郎編 2010『北麓遺跡 F 地点』鹿児島市教育委員会.
- 長野陽介編 2014『若宮遺跡 D 地点』鹿児島市教育委員会.
- 西田宏子 1993「南蛮・島物—南海請来の茶陶—」根津美術館編 1993 109-124 頁.
- 新田栄治 1997a「知覧城出土のタイ産陶片と薩摩の海外貿易」『知覧文化』34 161-175 頁.
- 新田栄治 1997b「知覧・豊玉姫神社所蔵のクリスと薩摩の東南アジア貿易」『ミュージアム知覧紀要』3 1-14 頁.
- 根津美術館編 1993『南蛮・島物—南海請来の茶陶—』同館.
- 橋口亘 2011「南九州出土の東南アジア産陶磁についての一考察」『陶磁器流通と西海地域』13-21 頁 関西大学文化交渉学教育研究拠点.
- 平良市史編さん委員会編 1988『平良市史 第8巻 資料編6 (考古・人物・補遺)』平良市教育委員会 (現宮古島市).
- 深野信之編 2004『始良町内遺跡詳細分布調査報告書』始良町教育委員会 (現始良市).
- 深港恭子 2013「千鳥印のある白薩摩と商売焼に関する一考察—立野並苗代川焼物高麗人渡来在附由来記—を中心に—」『からから』27 25-31 頁.
- 深港恭子 2014「窯業産地としての苗代川の形成と展開—薩摩焼生産の歴史—」『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』159-189 頁 岩波書店.
- 藤野義久・出口浩編 2006『大龍遺跡 D 地点』鹿児島市教育委員会.
- 本田道輝・下山覚編 1986『鹿大考古』4 (大龍遺跡第5・6次調査報告) 鹿児島大学法文文学部考古学研究室.
- 毎田佳奈子 2006「薩摩藩江戸屋敷の“薩摩焼”(1)—

- 土瓶・水注・銚子一」『東京考古』24 129-155頁.
- 毎田佳奈子 2007「薩摩藩江戸屋敷の“薩摩焼”(2)―碗・鉢・皿・その他―」『東京考古』25 119-136頁.
- 前田幾千代 1938「薩摩寸胡録を語る」『茶わん』85 85-91頁.
- 松村真希子 2006「「島津家文書」にみる薩摩焼」『東洋陶磁』35 97-112頁.
- 弥栄久志編 1992『鹿児島城二之丸跡(遺物編)』鹿児島県教育委員会.
- 向井互 2013「タイ・ミャンマーの陶磁生産と海外輸出」『陶磁器流通の考古学』233-254頁 高志書院.
- 向田民夫 1978『日本の陶磁9 薩摩』保育社.
- 吉永正史他編 2001『大龍遺跡B地点』鹿児島市教育委員会.
- 山内利秋他編 1997『上野忍岡遺跡群:東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校建設予定地地点奏楽堂建設予定地地点』東京芸術大学発掘調査団.
- 横田八重美・山田哲也 1985「近世大名の茶会記」『茶道聚錦5 茶の湯の展開』275-283頁 小学館.
- 渡辺芳郎 2000「宋胡録と薩摩焼宋胡録写―考古学資料の検討―」『メコン流域の文明化に関する考古学的研究 科学研究費補助金研究成果報告書(代表 新田栄治)』68-91頁 鹿児島大学法文学部.
- 渡辺芳郎 2004a「近世陶磁器から見た鹿児島と沖縄」『第5回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表資料集「20年の成果と今後の課題」』63-78頁 沖縄考古学会・鹿児島県考古学会.
- 渡辺芳郎 2004b「豎野稲荷窯跡採集資料」『鹿大史学』51 35-49頁.
- 渡辺芳郎 2004c「模倣と技術交流―陶磁器生産におけるコミュニケーション―」『コミュニケーションのかたち―ことば・もの・メディア』鹿児島大学全学総合プロジェクト「新しい関係性を求めて―コミュニケーションの諸相」平成15年度報告書 63-78頁 鹿児島大学.
- 渡辺芳郎 2005「なぜ薩摩藩は苗代川に朝鮮習俗を残したのか?」『鹿大史学』52 9-18頁.
- 渡辺芳郎 2006「近世薩摩焼の藩外流通に関するノート」『金大考古』53 1-6頁.
- 渡辺芳郎 2012「近世薩摩焼の生産と藩外流通」『江戸遺跡研究会会報』133 38-65頁.
- 渡辺芳郎 2013「献上品容器としての薩摩焼―島津斉彬の「御庭焼御鉢」について―」『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』78 53-59頁.